

## シンポジウム 封鎖都市と演劇身体 登壇者プロフィール

如月小春（きさらぎ こはる 1956 - 2000）

劇作家・演出家。大学在学中に「劇団綺崎」で活動を始め、1976年に処女戯曲『流星陰画館』を発表。その後、『ロミオとフリージアのある食卓』（1979年初演）で注目を集めた。『光の時代』『家、世の果ての…』『ANOTHER』『工場物語』などの作品を次々と発表した。1982年、自らの劇団「NOISE」を設立し、『DOLL』『MORAL』などを上演。80年代末以降は『NIPPON CHA! CHA! CHA!』『A・R - 芥川龍之介素描』『夜の学校』『朝、冷たい水で』等の作品を発表し、次なる如月演劇の地平を示しつつあった。野田秀樹、渡辺えり子、木野花らとともに1980年代の小劇場ブームをリードした演劇人である。エッセイやテレビ出演も多く、テレビでは「週刊ブックレビュー」（NHK）を長く続けた。坂本龍一とのラジオパフォーマンスや坂本によるプロデュース作品「NEO PLANT」もある。アジア女性演劇会議実行委員長、日本ユネスコ国内委員会委員、兵庫県立こども館演劇活動委員等も歴任。2000年12月19日、クモ膜下出血のため死去。44歳没。

吉見俊哉（よしみ しゅんや）

東京大学教授、東京大学出版会理事長。1957年生まれ。東京大学理科I類に入学後、同大学教養学部教養学科卒業。東大新聞研究所助教授を経て現職。集まりの場でのドラマ形成を考えるとところから近現代日本の大衆文化と文化政治を研究。演劇論的アプローチを基礎に、日本におけるカルチュラル・スタディーズの中心的存在として先駆的な役割を果たした。主な著書に、『都市のドラマトウルギー』『「声」の資本主義』『大学とは何か』『アメリカの越え方』『視覚都市の地政学』『トランプのアメリカに住む』『アフター・カルチュラル・スタディーズ』『五輪と戦後』『東京裏返し』等。

## セッション1 20世紀末都市の彼方から——消費都市と演劇する身体

細川周平（ほそかわ しゅうへい）

音楽学者、国際日本文化研究センター名誉教授。1955年生まれ。東京大学理学部生物学科を卒業後、東京芸術大学大学院音楽研究科で学び、東京工業大学助教授を経て国際日本文化研究センター教授。『音楽の記号論』『ウォークマンの修辞学』などの著作で日本のポピュラー音楽研究に影響を与える。1990年代から日系ブラジル移民研究に関心を広げ、『サンバの国に演歌は流れる』『シネマ屋、ブラジルに行く』などを執筆、『遠きにありてつくるもの』で読売文学賞受賞。近年は、全4巻から成る『近代日本の音楽百年』を出版。

土佐尚子（とさ なおこ）

メディアアーティスト、京都大学教授。1961年生まれ。MIT Center for Advanced Visual Studies フェローアーティストを経て、京都大学学術情報メディアセンター教授、同情報環境機構教授、同総合生存学館教授などを歴任。アーティストとして創造活動に携わりつつ芸術とコンピュータの融合領域で多くの研究を発表し、マルチメディア国際会議での最優秀論文賞、ロレアル大賞、アルスエレクトロニカインタラクティブアート部門賞等を受賞。2000年代以降、日本文化をインタラクティブアートで体験してもらう山水禅システム等を創

作、ユネスコ主催デジタル文化遺産コンペ2位受賞。2016年度文化庁文化交流使を拝命。2020年度芸術科学会より Art & Science Award 受賞。著書に『カルチュラル・コンピューティング』等。

高山明（たかやま あきら）

演出家・アーティスト。東京藝術大学大学院映像研究科教授。1969年生まれ。2002年に演劇ユニット Port B を結成。都市の特定の場所の社会的文脈の中で、インスタレーション、ツアー・パフォーマンス、社会実験プロジェクト等を通じて観客との相互作用を誘発してきた。近年では、美術、観光、文学、建築、都市計画といった異分野とのコラボレーションに活動領域を拡げている。作品に『個室都市シリーズ』（東京、京都、ウィーン）、『完全避難マニュアル』（東京、フランクフルト）、『ヘテロトピア・プロジェクト』（東京、台北、アテネ、バイルート、アブダビ、リガ、フランクフルト）、『東京修学旅行プロジェクト』、『マクドナルドラジオ大学』（フランクフルト、ベルリン、東京、金沢、香港、ブリュッセル）等。

堀内仁（ほりうち じん）

演出家。1968年生まれ。上智大学入学と同時に、演劇活動を始める。自らのプロデュースチームで演出を続ける傍ら、1989年、如月小春主宰の劇団 NOISE に俳優・演出助手として参加。如月小春作・演出の『ESCAPE』『A・R』などに出演。1996年、NOISEの海外公演『青ひげ公の城』に演出助手として参加。1997年に渡英。王立演劇学校（RADA）で学ぶ。1997年、NOISEの俳優たちと演劇ユニット LABO! を結成、以後、演出を担当。チャーホフ「ワーニャおじさん」、別役実「ジヨバンニの父への旅」、唐十郎「秘密の花園」などを演出。

## セッション2 ニッポンの終わり、浮上するアジアと女性

李静和（り ぢょんふあ）

政治学者（文化の政治学）、成蹊大学法学部教授。韓国済州島生まれ。1988年来日。著書に『新編 つぶやきの政治思想—求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの』（岩波現代文庫、2020）、『求めの政治学—言葉・這い舞う島』（岩波書店、2004）。編著に『残傷の音—「アジア・政治・アート」の未来へ』（岩波書店、2009）、“Still Hear the Wound, Toward anAsia, Politics, and Art to Come”（Cornell University, 2015）。共著に『スピヴァク、日本で語る』（G・C・スピヴァク、鶴飼哲他、みすず書房、2009）、『異郷の日本語』（金石範他、社会評論社、2009）他。「東京芸術祭ワールドコンペティション2019」に批評家審査員として参加。青森県立美術館2021年（震災10周年）特別企画展共同キュレーター。

矢内原美邦（やないはら みくに）

振付家、演出家、劇作家。近畿大学准教授。アジア女性舞台芸術会議実行委員会代表。1971年生まれ。ダンスカンパニーニブロール主宰。日常の身ぶりをモチーフに現代の空虚さや危うさを提示する独特の振付けは国内外での評価が高い。2007年に第1回日本ダンスフォーラム賞優秀賞受賞。オレゴン・ダンスフェスティバル、サンフランシスコ・BUTO フェスティバル、ベルリン・フュージョンフェスティバル、ラオコン・フェスティバル等に招聘公演。演劇にも挑戦し、2012年に第56回岸田國士戯曲賞受賞。多数のアーティストとコラボ

レーションしつつ、美術作品の制作も行い上海ビエンナーレ、大原美術館、森美術館等の展覧会に参加。

#### 羊屋白玉（ひつじや しらたま）

演出家、劇作家、俳優。シアターカンパニー「指輪ホテル」芸術監督。劇場での公演の他、国内外の現代美術の芸術祭に招聘され、サイトスペシフィックな環境で演劇作品を発表している。人や物や街など、あらゆる現象の看取りや喪失、目に見えない境界などに関するネガティブなテーマの取り組みを演劇を通して生成している。社会学や民俗学に基づいた生活史のアーカイヴ作りから、歴史における発展と保存の対立の中、どのようにバランスのとれた未来をつくってゆけるかをミッションとしている。アジアの女性舞台芸術家たちとのコレクティブを目指すアジア女性舞台芸術会議代表。ニューズウィーク日本誌で「世界が認めた日本人女性100人」に選ばれている。

#### 相馬千秋（そうま ちあき）

アートプロデューサー／NPO 法人芸術公社代表理事。国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー」初代プログラム・ディレクター（F/T09 春～F/T13）、横浜の舞台芸術創造拠点「急な坂スタジオ」初代ディレクター（2006-10年）、文化庁文化審議会文化政策部会委員（2012-15年）等を歴任。国内外で舞台芸術を中心としたプロデュースやキュレーションを多数行っている。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。2016年より立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授。2017年に「シアターコモンズ」を創設、現在に至るまで実行委員長兼ディレクターを務めている。2019年には「あいちトリエンナーレ 2019」のパフォーミング部門のキュレーターも務めた。

### セッション3 廃墟のなかから：身体と声、言葉を立ち上げる

#### 野田秀樹（のだ ひでき）

演出家、劇作家、役者。1955年、長崎県生まれ。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授、東京キャラバン総監修。東京大学在学中に「劇団 夢の遊眠社」を結成し、数々の名作を生み出す。92年、劇団解散後、ロンドンに留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。『キル』『赤鬼』『パンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『逆鱗』『足跡姫～時代錯誤冬幽霊～』『贗作 桜の森の満開の下』『Q』：A Night At The Kabuki』など、数々の話題作を発表。モーツァルト歌劇『フィガロの結婚～庭師は見た!～』等オペラの演出、『野田版 研辰の討たれ』や『野田版 桜の森の満開の下』で歌舞伎の脚本・演出を手がけるなど、演劇界の旗手として枠を超えた精力的な創作活動を行う。2015年よりブラジル、東北、東京、京都など国内外の多種多様なアーティストとの文化混流による文化サーカス「東京キャラバン」を展開。さらには、海外の演劇人と積極的に外国語作品を創作し続け、20年2・3月には、台湾・NYで『One Green Bottle～表に出ろいっ! English Version～』を上演。世界を駆け巡り、意欲的に活動している。09年10月、名誉大英勲章OBE受勲。09年度朝日賞受賞。11年6月、紫綬褒章受章。

#### 横山佐和子（よこやま さわこ）

兵庫県立こどもの館館長、兵庫県青少年本部業務執行理事。1955年生まれ。兵庫県立男女共同参画センター

所長、同県民文化局長等を経て2014年4月より現職。1990年代、如月小春は兵庫県立こどもの館で子どもたちとの演劇制作に従事するが（『8月の子どもたち』所収）、如月氏が育てた演劇への想いは、当時の教え子が指導者やサポーターとなり、この夏第30回公演を行った「こどもの館劇団」の中に引き継がれ、館長就任以来7年間、館劇団をはじめとした若者の活躍を応援する様々な事業に取り組んでいる。

#### 外岡尚美（とのおか なおみ）

青山学院大学教授、同大学前副学長。1960年生まれ。上智大学卒業後、ハワイ大学大学院で学び、青山学院大学で教鞭をとる。アメリカ演劇、パフォーマンス理論、ジェンダー・セクシュアリティ論、多文化主義を専門とし、「女性劇作家の主体位置—如月小春と物語（ナラティブ）の脱構築」などの著作もある。如月小春の推進した第1回アジア女性演劇会議に実行委員として、そしてその後海外各地で開催された同会議にも第5回まで参加した。主な共著書に『戦争・詩的想像力・倫理』『〈都市〉のアメリカ文化学』『ギリシア劇と能の再生』『英米文学に見る男女の出会い』『境界を越えるアメリカ演劇』『多文化主義で読む英米文学』『アメリカ文学の〈自然〉を読む』等。

#### 内野儀（うちの ただし）

学習院女子大学教授。1957年生まれ。東京大学文学部卒業後、岡山大学専任講師、明治大学助教授等を経て東京大学教養学部教授。2017年より現職。ユージン・オニールからパフォーマンス・アーツに至る20世紀アメリカ演劇を専門とし、AICT国際演劇評論家協会日本センター事務局長、『シアターアーツ』編集委員などを務めた。著書に、『メロドラマの逆襲』『メロドラマからパフォーマンスへ』『J演劇』の場所』などがある。

#### 太下義之（おおした よしゆき）

同志社大学教授、国立美術館理事。1962年生まれ。専門は文化政策。博士（芸術学）。文化政策研究者、同志社大学教授、国際日本文化研究センター客員教授、独立行政法人国立美術館理事、静岡県「演劇の都」構想策定委員会委員等文化政策関連の公職・委員を多数兼務。著書に、『アーツカウンシル』などがある。

### 閉会の辞

#### 瀧川真澄（たきかわ ますみ）

女優、2020如月小春プロジェクトコーディネーター。大学在学中から「劇団綺崎」の舞台上で演じ、「NOISE」設立、如月小春と演劇活動を共にしてきた。1997年に堀内仁らとLABO!を結成、現在に至る。各地での如月作品の再演を含む、今回の「2020如月小春PROJECT」全体のコーディネーターの役割を果たす。松本演劇祭、戸賀フェスティバル、アムステルダムジャパンフェスティバルなどに参加。世田谷美術館、兵庫県立こどもの館、静岡県海の星高校、横浜青少年センター、山手学院など各地で演劇ワークショップを指導。